トポスにおける発達

第 9 回

—環境の探索としての移動—

無藤　隆

歩くことの社会化

子どもはほぼ満一歳前後で歩き始める。初めは、伝い歩いたり、大人に手を取ってもらって歩いたり、独立して数歩を歩むだけだが、すぐに一人でどしどし歩くようになる。体重の移動とそれを支える足の筋肉が発達すれば歩けるのである。それでも、段があれば、上がったり降りたりするのは簡単ではない。走ったり、飛び降りたりするのは、一歳代の子どもにとって大事な発達の目安だろうし、子ども自身も初めはおずおずと、その内喜んですることである。歩いたり走ったりはその意味では一歳代を通して出来るようになる運動である。二歳過ぎておむつが取れる頃に相当自在に歩き走り回れるようになる。

では、歩くことは、その段階で発達は完成し、後は特に変化はないのだろうか。そうではない。「発達」と呼ぶかどうかはともかく、学校に入っても、歩くことや走ることをめぐっての指導がある。例え

ば、行進することがそうだ。朝礼でも運動会などでも整然と行進して入退場することは小学生には難しい。廊下などにも「静かに」とか「走らない」といった注意書きが貼られていて、しょっちゅう先生が注意を与えているのが現状である。速く走ることも決して上手には出来ない。短距離でも長距離でもそれなりの走るフォームやリズムがあるからである。

幼稚園や保育園でも歩くことの指導はないわけではない。保育園の「お散歩」などでは園の外に出ていくために安全上一列になるとか、二列で隣の子と手を繋ぐとか、前の子どもとの間隔を開けないようにすることなどがしつけられる。目的地に着くまでおしゃべりやよそ見をしないようにと注意を与えることもある。幼稚園でも特にクラスでまとまって移動する場合など同じようなしつけがなされる。

そういったことは移動することつまり歩くことのマナーの類で、移動をめぐっての発達とは言えないのではないかと思われるかもしれない。「発達」と呼ぶかどうかは別として、大人なら出来る目的地までの整然とした移動を子どもが出来ないことは確かであろう。学校がそのための社会化の働きを担っていることも明らかだ。

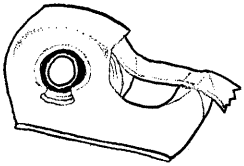
実際、幼稚園などで子どもを見ていると、整然とつまり前を向いて目的となる場所に歩行にふさわしい一定の速度で移動する様子というのはあまりない。のたのた歩いたり、走ったり、スキップしたり、回りをきょろきょろと見回したり、友だちとおしゃべりをしたり追いかけっこをしたり、突然後ろを振り向いたり、遠くの友だちに声を掛けたりする。唐突に駆け出したり、立ち止まったり、ふと目に付いたおもちゃや草や鎖などに触ってみる。しゃがみ込み、寝ころぶ。ぐるっと回って戻ってくる。ちょっとだけ友だちの遊びに入ってまた先に行く。友だちともつれ合い、ときにはおんぶやだっこの真似をする。かと思うと、何かを目指してまっしぐら

に走る。ほとんど一定の移動のパターンはないようだ。

整然とした移動以前の揺れ

なぜ既に歩ける子どもがこのように整然とした移動が難しいのだろうか。単に体を動かす運動という意味では歩いて移動できるはずである。また、必ずしも目標が持てないからではあるまい。目標なしに動いているときはあるにせよ、目標をめざしていても、整然とした移動が難しいからである。

移動することがA地点からB地点に速やかに位置を変えることだというのはおそらく大人の見方である。子どもにとってはその移動の時間自体が重要になっている。目指す先にほしいものがある場合など、途中のものを無視するかもしれないが、その移動の時間が長かったり、途中で面白いものがあれば気が変わるかもしれない。また、特に目標がなく何となく動き回ったり何か面白そうなものを探して動く場合もある。移動の動き自体を楽しむことさえある。走ったりスキップしたり自体が楽しいのである。



何であれ、目標に向けて整然と進むように小さな子どもは出来ていない。目標を頭の中に描いて保持し続けることが難しいのだろうし、保持しているにしても回りに目に付くことの影響が強い。いやむしろ、移動すること自体が何か先にあるものを目指すことと共に回りにあるものへの関わりであり、適応の過程であると見なすことが出来る。いかに既に歩けるとは言え、例えば、ちょっとした段を越えることや曲がること、一回りすることなどがまだなお新鮮であるらしい。その身体的動きとそれに伴う回りの見え方が変わることが面白いのではないか。

回りにある光景を眺めることも重要らしい。園などでは仲良しの子がいるかと探したり、何か面白い遊びをやっていないかと眺め回ったり、目新しいことが起こっていないかを見て回ったりを子どもがよくしている。自分の遊びに集中している時間もあるが、そうではなく、ぶらぶらと歩き回り、何かを探しているらしいこともある。ただ何をするともなく、保育室や庭の回りを一周してくることもある。その途中で気の付いたことがあると、ちょっと見てみて、いつの間にかそこにいついて深入りしていることもある。

道の様子に適応したり、回りを眺めたりしているようだが、それで説明できるのでもない、よく分からないフラフラした動きを子どもがすることも多い。単なるランダムな動きなのかもしれない。「揺れ」とでも言えるようなでたらめみたいな動き方である。自分の体をちゃんとコントロールできないからかもしれないが、それ以上に、子どもの動きが揺れを本来的に含んでいて、揺れがあるからこそ生き生きとしているとさえ感じられる。

そう考えると、整然とした移動や行進はそういった揺れやら眺めることやらを排除して、無理に子どもを一定の型に押し込めるとさえ見えてくる。大人が通勤の途上に込んだ駅の構内を移動するときには、人の流れに沿いながら、黙々と移動せざるを得ない。そこにはほとんど喜びらしきものはない。耐えているのである。耐えることを学び、回りに迷惑を掛けない行動の仕方を学ぶ必要があることは確かだが、その必要がないところでは、子どもは（大人も）もっと生き生きと動いたらよいはずである。

実はもっと正確に言えば、大人の整然として見える移動の中にも動きの喜びは派生しうる。誰かに強いられるのではなく、自分のペースでただ歩くことは大人にとってあまりないから、その喜びを忘れているかもしれないのである。

少なくとも、子どもを社会化し秩序ある移動の仕

方を教える際に、生き生きとした動きをそこに許容しつつ、より整頓された方向へと持っていく援助の仕方が求められる。子どもが移動に際していかなる動きを示して、何に喜びを見出しているのか。大人はその喜びをつぶすことなく、いかにして世の中の秩序との両立を可能にしていくのか。これが重要な検討課題である。

移動するトポス

子どもは移動する際に単にまっすぐ目標に向けて動くのではない。環境との関わりにおいてまた単に揺れることで様々な動きを示すのである。このことは、トポスという観点からは何を意味するのだろうか。一つは、移動するための空間があるということである。道や廊下はそのために初めから作られた空間であり、移動するのに都合がよいように、移動の方向に沿って細長い形を取っている。その上、回りの場所へのまた回りの場所からの出入りが制約されれ、ときに景観も制限されていることが多い。学校の廊下が典型的であり、掲示物は見られるし、上の方の階であれば窓から校外の景色が見えたりもするが、大体は見渡しても面白いものは見えない。教室ものぞけないのが普通だ。幼稚園の場合には必ずしもそうではない。廊下も窓から外がよく見えたり、出入り口の開放部分が大きかったり、いくつもあったりする。外廊下を使っているところも多く、庭や保育室との出入りが容易であるだけでなく、互いに見えるし、声を掛けられる。広めの廊下などだとその場所で留まって遊ぶことが許されている場合も多い。移動のための空間がそれだけの機能で単純化されておらず、回りを見るという機能やそこで遊ぶ機能を兼ね備えているのである。

子どもが見出す独自の「道」がある。例えば、公園や林の中の藪の下の「道」とか、家と塀の間のわずかな隙間を通る「道」、まっすぐ行けるのに回っていく場合、障害をわざと乗り越える場合などであ

る。どれも確かに通過するのであるが、しかし通過自体が困難を抱えている。不自由さを含みながら、それを乗り越えるところが面白いのかもしれない。思いがけない変化を伴うので、その意外性が好まれるということもありそうだ。移動する空間が移動ということ自体を越えて、独自の個性を持ち始めるのである。

移動する空間を含みつつ、そのトポス全体が移動により活性化するということがある。面白いことがないかと移動しつつ探したり、移動している子どもと遊んでいる子どもの間に交流が生じたりするのがそれである。そもそも、一様な空間から成り立つのでない限り、トポスとしての空間はさらにその下位となる空間に区切られており、だが、その区切りは緩やかであったり、柔軟であったりするのである。さらに、区切り自体が独自の特質を持った空間にもなり、その一つが移動する空間とここで呼んでいるものである。移動することがトポス全体をいかにして結びつけるのか、またトポスをいかにして複雑で多様なものにするのかがここで問われている。移動することがそれ自体として独立した動きをなしたところで、逆に、その移動しつつあるときにその動きが他の空間での動きとの関連を持つように、空間は構成されていかねばならない。それがトポスの意味を豊かにする一つの方策となるのである。

歩きつつ環境を探索する—母子の事例の検討

我々の研究室では（出口加奈子「幼児期前期の子どもの道を歩く行動における環境の探索」平成五年度お茶の水女子大学家政学研究科児童学専攻修士論文）、以上のような問題意識の下で、一～三歳の子どもとその母親が「散歩」（実際には公園に行くとか買い物に行く途中）している様子を観察し、子どもの動きを記録した。その要点を追いながら、小さい子どもの歩き方がいかに環境との関わりを実現する行為であるかを見てみよう。

ここでは、一歳半から三歳終わりまでの六十組の母子について、普段外出する道に観察者が付いて歩き、ビデオの撮影をした（ビデオカメラを腰につけてビューファインダーを時々のぞき込む形にして、観察者はフィールドノートを付けることにした）。母親の働きかけの言葉と、子どもの動きを分析した。子どもの動きとしては、回りに関わる行動に注目した。特に、回りのものに注視する、触れる、提示・指さし・言語化などである。また、登ったり飛び降りたりなどの全身的行動も記録した。

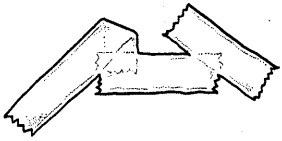
歩いているときにどのようなものを探索したのだろうか。生物（動物・鳥・昆虫）、植物、乗り物、人、建物、置物や看板・標示等、棚、塀、段など、回りに見られる多くのものに関心が寄せられている。年齢との対応では、乗り物との関わりは年齢と共に下がり、看板や公園等については年齢と共に上がっている。

各々にどのような行動を取るのだろうか。乗り物については、見る行動が四分の三を占める。例えば、駐車中の車や走る車を歩道から見るのである。触れる行動は一割程に過ぎない。駐車中の車のそばによって触るのである。同様に、音から関心を抱く場合が一割ある。

例　二十三か月の女児

バイクが音を立てて過ぎていった後、「ブーッて行ったよ。ブーッて。」と力一杯声を出しながら進んでいく。

動物に対してはどうだろうか。やはり見る行動が多く、八割近くを占める。近くに寄って見ることがその半数以上である。ただ、事例を見ると、子どもの表情が大きく変わり、歓声を上げるのも多い対象である。表情はポジティブなのもネガティブなのもあ



る。

例　二十八か月の男児

「あっ、ゴンちゃんだ、ゴンちゃんだ。」と言って、立ち止まり、遠巻きにじっと見て、母のそばにピッタリと寄り添う。「ゴンちゃん、やだ。ゴンちゃんに食べられる。」とつぶやく。すると、母が「ゴンちゃんに食べられる？　ゴンちゃん怖くないよ。」と言う。犬が通り過ぎる間、母と子は立ち止まったままでいる。「ゴンちゃん、行ったから、手離していい？」と母が言い、手を離して、母子共々歩き出す。

例　二十一か月の女児

よその庭に猫がいるのが柵の隙間から見えて、母が指さして、「あっ、○○ちゃん。あっ、ニャンニャン！　ニャンニャン！」と言う。子がのぞいて、「ニャー。ニャンニャンね。ニャーね。」と興奮した様子で言う。「ニャーニャーニャーニャン。」と母の方を向いて笑う。「ニャーニャーいたね。」と母が応ずる。子は「ニャンニャンニャンニャー」としばらく言いながら歩く。指でヒゲを表しながら「ニャーニャーね。」と言う。

花や草になると、触る場合が増え、花は四割、草では八割の場合で触っている。

例　十八か月の女児

子どもがエノコロ草を引き抜こうとする。母が「これこれ」とエノコロ草を摘んで、「クチュクチュの草。コチョコチョで……いいなコチョコチョ」と言う。子が「クチュクチュ」と言いながら、草を両手で持って歩き出す。母が「○○ちゃん、自分でやってごらん。」と促す。子がエノコロ草を自分の頬にあてる。母「そう。」。子が「クチョクチョ」として笑う。母が「ママやって、ママ」と言う。子が母を草でくすぐる。「あーっ」と母は笑い、「くすぐったーい。」と足踏みする。続いて母は「じゃ、（クリーニング屋の）おばさんにもやってあげようか。もうすぐだよ。見えてきたぞー。」と

言う。

標示や標識は踏んで歩くとか飛び越える、登るなどの行動が九割を占める。

例　四十二か月の男児

子「ピョーン、ピョーン」と両足を揃えて跳びはねる。「ウサギだよ。跳ねるよ。ウーン（体を思い切りそらして）、ピョーン」と両足跳びをする。「あそこ（マンホール）の中にピョーン」と言って両足跳びでマンホールの蓋の上にのる。「あそこ（停止線）へピョーン」と停止線を跳び越える。「すごいでしょ」と母に言う。母「すごい。道路だって、ピョン、ピョン、ピョーン（片足跳びとスキップ）、ウサギになるんだよね。」と言う。

このように、子どもは母親と共に歩きながら、回りにあるものに興味を示し、関わる。親の側もそれを助けている。しかしまた、親の側はまったく道で遊んでいるだけでなく、しばしば目的地を示し（「……へ行こう」と言う）、さらに先にある場やものや活動についてのやり取りを行う。途中の段階でのものに言及して移動を誘うこともある。

例　先ほどと同じ十八か月の女児

母「もうすぐ。パパのワイシャツ、どうぞするんでしょ、おばさんに。どこだっけ？」。子が「ここ」と先を指さす。母が「そうだね、あっちね。よーし、もうちょっとだよ。」と励ます。

移動することは、幼い子どもにとって、自明なものとして成立していない。目の前のものに関わる活動としてまず成り立ち、その後、徐々に先にあるものとの関わりを想起し予期することを通して、移動としての働きを担うようになるのである。その場合でも、移動中に見られる環境の事物との関わりを失うことはないのである。

（お茶の水女子大学）